



Title	心に向けられたまなざし：『経験心理の学』（一七八三～九三年）に残された心の病をめぐる言説の検討
Author(s)	吉田, 耕太郎
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2016, 56, p. 1-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56932
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

心に向けられたまなざし

——『経験心理の学』（一七八三〜九三年）に残された心の病をめぐる言説の検討——

吉田 耕太郎

カントは『人間学』の冒頭において、文化におけるあらゆる進歩は、獲得した見識や技能を世界のために役立てること、そしてこの見識や技能を振り向ける「最も重要な目標は人間である」と公言して⁽¹⁾いた。カントだけではない。美学者ズルツァーの「人間の目を刺激するありとあらゆる対象のなかでも、人間こそが一番に関心のある対象である。これはひろく認められてはいないが、ある真理を言い当てている」⁽²⁾という主張、そしてまた観相学で有名なラーファターの「この地上においてわれわれの観察の対象になるものなかでも最も重要かつ目を引く対象は、人間である」⁽³⁾といった言葉から裏付けられるように、一八世紀後半の文化や思想を理解する上で、人間への関心はキータームとなる。この人間への関心の高まりは、政治そして経済の担い手としての市民の自覚の高まりを反映していると同時に、それまでの人間観を規定してきた心身二元論からのゆるやかな脱却に呼応したものであった。⁽⁵⁾「人間は、身体だけであるわけでもなく、心(Seele) だけであるわけでもない。人間は双方の調和である」⁽⁶⁾と述べるライプチヒの医師プラトナーは、人間についての旧来の学問を批判して、哲学者は人間の身体について今以上に知らなければならぬし、医師は今以上に人間の心について熟知しなければならないと述べる。人間への関心の高まりは、身体を熟知する医師と心を熟知する哲学者を合一したようなあたらしい人間へのまなざしを要求することになった。

1 身体と心の双方を備えた人間を出発点とすることで、哲学的に言うならば、心は物理的な世界から峻別された思惟実体ではなくなつた。人間の心への関心は、例えば、「教師そして教育者は、心の変化から目を離してならない」⁽⁷⁾という原則のもとに、人間の全人格的な

陶冶という教育思想の基礎になり、同時にまた、心を病む人間への関心からは、心理学や精神病理学といった新規の医学分野への扉を拓くことにもなった。

本稿は、人間への関心が高まった一八世紀後半における、人間の心へむけられたまなざしについて考察するものである。身体と心の双方を備えた人間の心には、哲学、教育、医学と複数の領域から発せられたまなざしが向けられた。このまなざしの重なり合いを、当時発刊された雑誌『汝自身を知れ、経験心理の学』（以下『経験心理の学』）を題材として具体的に解明したいとおもう。

なぜ『経験心理の学』が考察の手がかりとなるのか、その理由を示すために、この雑誌が扱う5つの分野について簡単に確認しておくことにしたい。

- 一 Seelenkrankheitskunde 心の病の学
- 二 Seelenaturkunde 心の本性の学
- 三 Seelenzeichenkunde 心の徴の学
- 四 Seelendiätetik 心の養生の学
- 五 Seelenheilkunde 心の治癒の学

この五分野は雑誌の第一巻一号の目次で提示されたものになる。『経験心理の学』が人間の心を主題的に扱っていることは言うまでもないが、その関心が多様であることがわかるだろう。例えば病と治療というキーワードから、医学的な関心を読み取ることができるし、心の本性からは哲学的な関心。また心の徴という分類では（これに類される記事の内容から判断するに）、教育、観相学、社交術への関心を読み取ることができる。

ところでこの『経験心理の学』では、この五分野について学術的に考究したいいわゆる論考の類は掲載されておらず、ある人物の伝記⁽⁸⁾、日記、犯罪者の犯罪記録、予知夢や白昼夢の報告、子どもの頃の想い出、教師による子どもたちの観察記録、言語の運用のような、具体的かつ雑多なデータが集められている点もまた、心に向けられた多様な関心の反映として注目に値するといえるだろう。

ちなみに、『経験心理の学』についてはこれまで三つの問題関心から研究されてきたといつてよい。第一にあげることができるのは、初期の編集主幹であったカール・フィリップ・モーリッツに関する研究としてである。モーリッツの心理学への関心の高まり、とりわけモーリッツの美学思想の発展の契機をたどる研究のなかで、本雑誌は言及されることが多い。ただし本雑誌は、後で確認するように、時期によって編集主幹は異なっており、雑誌には投稿記事も多く、全記事をモーリッツが単独で執筆していたわけではない。二つ目の関心は、一九世紀の精神病理学や実験心理学の歴史のなかに位置づけ、『経験心理の学』の価値を再解釈する研究である。⁽⁹⁾ その最たるものは、『経験心理の学』に掲載された症例を、現代の精神病理学の知見を用いて診断した研究であろう。⁽¹⁰⁾ またベルの研究では、本雑誌の記事を、その記事の内容から一二に分類が可能と主張しているが、この分類も一九世紀に成立する精神医学を強く反映したものであり、そもそも心の病が一八世紀後半にどのようにとらえられていたのかという考察が軽視されてしまっている。こうした研究では、例えば、この時代に特有の心の養生という関心をうまくとらえることができなくなってしまう。この心の養生という問題関心は、心の病を理解するための重要なキータームのひとつと考えられる。この点については、本論のなかで言及することにした。そして三つ目の関心は、本論冒頭でも言及した一八世紀を通じての人間への関心の増大、つまり人間学のひとつの成果として『経験心理の学』を位置づける研究である。⁽¹²⁾

本論は、基本的に三番目の関心を引き継ぐものであるが、人間への関心への高まりに呼応して、人間の心、とりわけ病んだ人間の心への関心が高まってきた点に着目するものである。心へのまなざしが、心の病という点へと折り重なっている様を、『経験心理の学』を手がかりにときほぐしてみたいと思う。

I. 経験の意味について

まず簡単に『経験心理の学』の書誌情報を確認しておくことにしたい。雑誌の正式なタイトルは『汝自身を知れ、経験心理の学のための雑誌』⁽¹³⁾であり、一七八三年から九三年まで年三回分冊が発刊された。分冊は各号おおよそ一五〇ページ弱となっている。編集者は、小説『アントンライザー』の著者としても知られるカール・フィリップ・モーリッツ、雑誌刊行時はベルリンのギムナジウムの教師をしていた。それからハレ大学にて神学および教育学を修めた後、ブラウンシュヴァイク＝ヴォルフェンビュッテル侯国の皇子の教育係のちに

同侯国の宮廷顧問官となったカール・フリードリヒ・ポッケルス。そしてカントの批判者として知られるザロモン・マイモンの三人である。この雑誌の発刊のために、上記三人は協力して編集をおこなっていたわけではない。それぞれが初期、中期、後期と編集主幹をつとめていた。それゆえ担当していた編集者によって雑誌記事の性格にも違いを認めることができる。とりわけ後期の編集をつとめたマイモンは、自ら筆をとって認識論的な論考を多数誌上に発表しているし、過去の記事を彼独自の認識論の視点から解釈した論考も執筆している。

『経験心理学の学』が何をめざした雑誌であったのか、経験心理学の学と聞いて、実験心理学のような分野を思い浮かべるかもしれない。確かに、『経験心理学の学』が出版されていた当時、心の所在をめぐって解剖学的な神経組織の解明したり、感覚の数量的な測定したりするような、実験によって心を解明しようとする研究は行なわれていた⁽¹⁴⁾、しかしこの経験心理学という語の由来をたどってみると、経験的心理学 (psychologica empirica) という、アリストテレス以来の人間の心的能力の序列に基づいて、感覚、想像力、記憶力といった下級の心的能力を論じたクリステイアン・ヴォルフの学説にたどりつくことになる。

ヴォルフの哲学体系のなかで、経験的心理学は、上級の心的能力を扱う理論的心理学 (psychologia rationalis) との対関係で論じられていた。論理的心理学は純粋な論理の形式ならびに神の認識に関連するものであり、その特徴はあくまでも心的な能力の能動性にあると定義されていた。他方で対におかれた経験的心理学は、受動性を特徴とする心的能力、つまり外から変化を受ける感覚、想像力、記憶力を対象とする学であり、具体的に言えば人間がこれら下級能力を用いておこなう物理的世界の認識つまり外的な物体の認識について、その仕組みや原理をあつかう学問であった⁽¹⁵⁾。

ヴォルフの経験的心理学のなかでもとりわけ重要なのは、イギリス経験論の影響を受けて、心的能力の働きを、「考え (Gedanken)」と名付け、心に変容が起きている状態として一元的に理論化した点にある。心的能力がいかに働いているのかを明らかにするあらゆる試みは、この心の変容から出発し、あくまでもこの心の変容を探索する心理学となる。とりわけ下級の心的能力が外から変化をうけている状態は、「感受状態 (Empfindung)」と定義されているが、これもまた心の変容のことであり、⁽¹⁷⁾ 五官を通しての外的物体についての認識は、感受状態という心の変容を基礎とする心理学の枠組みで説明されることになった。

「考え」または「感受状態」から出発するヴォルフの経験的心理学がもたらしたインパクトは、事物についての存在論的な本質を問う

ことなく、日頃われわれが見たり触ったりしているものについて得られる感覚データとしての「感受状態」を基に、物理的な世界を探索することを可能にした点に認めることができるだろう。それは同時に、物理的な実体とは区別された心についてもまた、物理的な物体と同様に、心に生じる変化を通じて近づくことができるようになったことを意味した。

こうしたヴォルフの経験的心理学は、「経験」という語義の変遷のうちにその影響をはっきりと残している。ヨーハン・ゲオルク・ヴァルヒの『哲学事典』をひもといてみると、経験というタームはそもそも、それぞれの身分や職種において時間をかけて習熟される知、言い換えるならば経験を積んで得られる技能や才知を意味していたことが確認できる。しかし一八世紀中葉になると、『哲学事典』一七七五年刊行の第四版から加筆された項目にみられるように、経験は認識を得るためのひとつの手段として登場するようになる。

経験とは「具体的というならば、五官をとおして得られた「感受状態」に基づいた認識「…」とりわけ身体的作用から引き起こされる外的な「感受状態」に基づいた認識「…」または感受した現象をもとに、観察、注視、実験を通して獲得される認識」⁽¹⁸⁾と解説されている。この加筆部分に、「感受状態」を認識の基礎をおいたヴォルフの心理学の影響を容易に認めることができるだろう。経験とは、感覚を通して得られた外的な世界の情報に基づいた認識であり、この情報を観察や実験を積み重ねることによって確実性を高めた認識ということになる。このような経験の語義を引き受けて人間の心を探求したのが、クリューガースの『実験心理の学』⁽¹⁹⁾であった。⁽²⁰⁾

実験心理学とはいえ、「実験器具の助けをかりて心を計測するようなことはしない」⁽²¹⁾と冗談を交えながら、クリューガースは自らの立場を、「経験が心について教えてくれることを第一の源泉として」⁽²²⁾心について探求する立場であると弁明している。ここでクリューガースが実験という語を、ヴァルヒの事典で解説されていた、観察や注視を重ねて確実な知識を得るといふ経験による心へのアプローチの意味で用いているのは明らかだ。

心の実験をすすめるために、クリューガースがとった具体的な手段が、心についてのデータの収集であった。その成果は、『実験心理の学』の付録として出版された記録集として結実している。この記録集は付録といふものの、その分量は本論とほぼ同じ二八八ページにおよぶものであり、投獄され死の恐怖から頭髮が一夜にして白髪になってしまったフランス人貴族、⁽²³⁾熱病にかかって記憶を喪失し文字が読めなくなってしまうスペイン人、⁽²⁴⁾また逆にショックから言葉が喋れるようになった啞者をはじめとして、突然死、記憶喪失、夢遊病、心の病からの劇的な治癒など、心の病に関連するデータ（なかには水かきをもって生まれた嬰兒の報告など）心の病とは無関係の報告

も含まれるが⁽²⁵⁾を、膨大な量の先人たちの観察記録から抜粋したものであった。観察データを集積することによって心についての探求をすすめようというクリューガースのアプローチは、その二〇年後に発表されたテーテンスの『人間の本性とその発展についての考察』にも引き継がれている。

「物質ならざる存在、脳、魂をあたえられた脳、その呼び名はどうかであれ、さまざまな仮説ではなくただ観察 (Beobachtung) だけが、われわれに心 (Seele) について教えてくれる⁽²⁶⁾」。テーテンスが人間の心の諸能力の解明するために選んだ方法もまた、心に生じている変化をひとつひとつ観察し、それを積み重ねることであった。クリューガースそしてテーテンスの探求の根底に流れているのは、心と身体の双方を有する人間を考察の対象とするならば、心の考察もまた、身体とは区別された実体として形而上学的に考察することはもはやできないというあたらしい人間理解、身体からの変容を受けている心に目を向けようとする態度であった。そのために選ばれたのが、心を観察し注視する経験という方法であった。

心に関連する多数の記事を集める『経験心理学の学』もまた、ヴォルフの経験的心理学によって拓かれ、クリューガースによって形作られた、経験を介して心にアプローチしようとした雑誌であったと評価することができる。『経験心理学の学』のデータ重視の姿勢は、その発刊準備中に、第一期の編集主幹をつとめたモーリッツが執筆した発刊告知文のなかにはっきりと示されている。

「この雑誌『経験心理学の学』では、刊行後しばらくは、事実の収集だけをおこなうことにしたい。[...]ただしこの事実は、必ずある特定の人物に関連するものでなければならず、最終的には、その人の歴史を描き出すようなものでなければならぬ。この雑誌では、人物の内面の歴史に関連する題材があつめられなければならない。さらには、取るに足らないように見えながら、その人の歴史全体を俯瞰すると、大きな影響を与えているような小さな出来事に目を向けさせるような題材でなければならぬ。[...]そしてまたこのような記事は、たとえば改善の過程をあつかったような、かならず意味ある内容のもでなければならぬ。それは例えば、若者をはじめ様々な年齢の大人たちを対象とするもので、何かしら欠陥 (Fehler) があり、正しい学校教師や教育者の手によって、うまく解決した人もいれば、うまくいかなかった人もいる、こうした改善の試みを扱ったものでなければならぬ⁽²⁷⁾」。

この告知によるならば、『経験心理学の学』では、伝記や日記が残されている実在した人物に関連する記事が集められることになる。こうした記事の目的は、些細な出来事にこそ着目し、それがその人の生涯のなかで、大きな意味をもっていたことに気付かせる個人史の

ようなものが推奨されているといえるだろう。さらに重要なのは、この個人史のような記録のなかでも、欠陥からの改善のプロセスを扱ったものでなければならぬという点だ。ところで、この欠陥という表現で何が想定されているのだろうか。当然思い浮かべるのは心の病だ。というのもこの事実の収集について語っている引用のすぐあとに、次のような説明が続いているからだ。

「メンデルスゾーン氏みずからが次のような示唆を与えてくれた。医学と経験心理の学には平行関係がみとめられる。具体的には、経験心理の学は、心の生理学、心の病理学、心の治療術、心の養生学に分類できると」⁽²⁶⁾

告知文の著者であり、経験心理の学の刊行準備および最初の編集主幹をつとめたモーリッツは、当時ベルリンのギムナジウムにて教鞭をとっていた。ここに登場するメンデルスゾーンとはモーゼス・メンデルスゾーンのこと、モーリッツは、自らが準備している雑誌についてメンデルスゾーンと直に対話をする機会があり、その席でメンデルスゾーンは、刊行準備中の経験心理の学に、心を対象とする医学としての役割を期待する発言を残したということになる。そしてこのメンデルスゾーンが提案している病理学、治療学、養生学は、そのまま既に確認した記事の分類のうちの一部へと引き継がれることになった。

『経験心理の学』が心の医学を目指していたことは、モーリッツが書いた別の告知文からも読み取ることができる。「人類にとって、身体についての医術よりもさらに必要不可欠であるのは、いまだ存在していない心の病の学 (Seelenkrankheitslehre) でないだろうか！この有益な学は、何年間もの長い期間をかけて、人間の心に注意を向けることが要求される。こうしたことが原因でこの類いの学がいまだ存在していないのであろう。そしてまた心の病の学には、身体の医学よりも千倍もの多くの観察 (Beobachtungen) と経験 (Erfahrungen) とが必要になるであろう」⁽²⁹⁾。

この引用から、『経験心理の学』の目的がはっきりとしてくる。この雑誌は、心の医学を準備するためのもの、そして雑誌に集められた一連の事実は、心の医学を確立するための観察や経験のデータということになる。つまり「経験心理」とは、経験を通して心の病にアプローチするという研究態度の表明であったといえるだろう。

Ⅱ. 心の病とその記述

先ほど引用した告知文のなかでは、心の病についての医学はいまだ確立されていないとモーリッツは主張していたが、そもそもこの心

の病というものが何であるのか、この雑誌のなかでどのように定義されているのかを確認する必要があるだろう。データ収集を主眼とした『経験心理の学』では、心の病という疾患を病理学的に論じるような記事は掲載されておらず、心の病そしてその治療について次のように簡単に触れられているだけである。

心の病は、心的能力の均衡のとれた調和の欠如⁽³⁰⁾であり、そしてこの病気は、遺伝によって親から子どもに伝わるので、一家全員が心の病に見舞われることがある⁽³¹⁾。その原因は様々であり、誰にでも効果をもつような万能療法は存在しない。治療を試みる心の医師は、その原因から経過を詳細に調べなければならず、そしてその治療とは、心的能力の不調和をできる限り調和した状態に戻すことにある⁽³²⁾。さらに第四号には、第一号から第三号までの収録記事について、編集者が総括した記事が寄せられている。「私は気がついたのだが、これ以前の「一から三号」に収録した心の病に関連する記事は、多くの場合、狂気というものの多様な側面を描き出したものである。狂気は心の病のひとつである⁽³³⁾」。このような発言から、心の病は心的能力の不調和として説明され、収録された病の多くは狂気に類されるものとして考えられていたということになる。『経験心理の学』を、精神医学史に位置づける研究が発表されるのも、このような発言を引き受けていることであろう。

とはいえ、『経験心理の学』が公刊されていた当時は、心の病についての医学がまだ確立されていなかったことを思い返す必要がある。そもそも「心の病」という表現は、不信心や敬虔のなさを意味するものであり、一八世紀においてもなおこの意味は失われていなかった。教会での説教を集めた説教集は、一八世紀を通じて主要な書籍ジャンルのひとつをなしていたが、当時の説教集のなかには心の病がテーマとなっているものが多数含まれている。「第一に、原罪こそが病それから死の原因であることを知りなさい⁽³⁴⁾」。「神の怒りによって人間の心に不純な病気の種が植え付けられたのです。この原因により人間は、無秩序な感情、悪徳に満ちた空想や想像力を産み出すことになるのです⁽³⁵⁾」。無秩序で悪しき感情、空想、想像力、こうした心の能力の病は、人間の原罪に由来するものとして説明される。とすれば同時に、その治療は宗教的におこなわれなければならない。「心の病 (Seelenkrankheit) に際しては、超自然的な助力つまりイエスのお力が必要となるのです⁽³⁶⁾」。心の病は、キリスト教の伝統のなかでは、信仰によって治る病、医師ではなく司祭や牧師によって治療されるべき宗教的な病として語られていたものだった。

このように『経験心理の学』が刊行された一八世紀後半は、心の病という概念が、これまでの宗教的な意味で語られると同時に、精神

病理学的な疾患としても語られはじめた時代であった。だからこそその定義は一致してはいなかった。イギリス、フランス、イタリア、ドイツの代表的な論者の心の病の定義を「こ」で確認しておくことにしよう。

アレクサンダー・クラインソンは、心的能力の一般的な不調として錯乱 (delirium) と呼び、そこには躁病やメランコリーを含めている。心のうちの像と現実とを取り違える心の錯誤を幻想 (hallucination) と名付け、「こ」には、心気症や悪魔性、夢遊病などを含めている。また心的能力の衰弱を原因とする薄弱 (amentia) と「い」く「り」のなかには、愚鈍、記憶障害、知覚障害、推論の欠如、判断の欠如などを含めている。⁽³⁷⁾

臨床に基づいた精神病について数々の著作を残しているフランスのフィリップ・ピネルは、躁病を精神病疾患に共通する病として中心におき、「ひと」の対象に固執する錯乱としてのメランコリー、錯乱の伴わない躁病 (Manie ohne Delirium)、⁽³⁸⁾ 錯乱を伴う躁狂 (Wahnsinn mit Delirium)、薄弱 (Blödsinn)、愚鈍 (Idiotism) という分類を提示している。⁽³⁸⁾

ヴィンツェンツォ・キアルージはより簡便に、一時的に間違った判断をするメランコリー (Melancholie)、常に理念が混乱している躁病 (Manie)、⁽³⁹⁾ 心的能力が常に不規則または不完全に働いている薄弱または愚鈍 (Blödsinn/Dummheit) の三種類にわけている。

カントは冒頭でも言及した『人間学』のなかで、心の病気 (Gemüthskrankheiten) を、心気症 (Hypocondrie) と躁病 (Manie) に大別している。⁽⁴⁰⁾ 前者は、身体の病気を心が適切に把握できていないことに由来し、動物ではこのようなことはありえず、人間特有の症状であると説明している。躁病の特質は、急激な気分の変化にあり、自殺はこの気分の急激な変化によってひきおこされることがあると説明している。その他、メランコリー (Tiefsinnigkeit/melancholia) は、陰鬱な自虐から病みはじめ、苦しみに由来する狂気と説明されている。覚醒した者の熱を帯びた状態の錯乱 (Irreden/delirium) は、身体の病気であり、医師による予防対策が必要である。そして錯乱した者であっても、医師が身体的な病を認めることのできない者が、狂っている (verrückt) と「う」ことになる。

さらにカントはこの狂気 (Verrücktheit) について、表象をつなぎあわせることができな狂乱 (Unsinnigkeit/amentia)、想像力がつくりだした表象を真と「う」ける狂想 (Wahnsinn/dementia)、判断力の不調に由来する錯乱 (Wahnwitz/insania)、⁽⁴¹⁾ そして理性の不調に由来するきちがひ (Aberwitz/vesania) と説明している。⁽⁴¹⁾

このような心の病について「本質的に回復不可能な無秩序は何であるのか。心の病を体系的に分類することは不可能であり、そのよう

な試みに利点は少ない⁽⁴²⁾」とカント自身も断っていたように、ここで確認しておくべきことは、参照可能な疾患分類のようなものがいまだ確立されておらず、論者の数だけ心の病があるという状況のなかで『経験・心理の学』が刊行されていたということだ。だからこそデータの収集が必要であり、集められるデータは今日の視点からすればかならずしも精神病理学の枠内に収まらないものも含まれることがあった。

例えば、記事にしばしば取り上げられている、予知（夢）、虫の知らせ、占い、臨死体験の類いを読んでみると、この雑誌とシュューベルトの『自然科学の夜の側面の相貌』⁽⁴³⁾とのつながりが思い起こされるだろう。ロマン派に強い影響をあたえることになったシュューベルトのこの著作は、啓蒙の光に照らされた、自然科学的な法則に支配された世界から排除された諸現象、つまり夜という光の当たらない暗いままの不可思議な現象への思いをよせ集めたものであった。⁽⁴⁴⁾その意味で、『経験・心理の学』は、かならずしも心理学や精神病理学の単なる準備段階ではなく、科学という領域を超えた、より広い関心から心をながめた記録があつめられたものであったことを忘れてはならない。

それでは実際に心の病はどのように記録されているのだろうか。典型的なふたつのデータを紹介してみたい。まず第一巻一号に収録されている子ども殺しのザイベルだ。彼は狂気によって子どもを殺したと報告されている。彼の狂気が発現する場面の記述を引用しておく。

「殺害された」子どもへの強い愛情は、その子に手を下すことを幾度となく妨げていたのだが、たった一度の狂気に、ザイベルは不幸にも一瞬とらえられてしまったことによって、そしてまた沸き立った怒り (rasende Wuth) に襲われながら、彼はその子を殺害したのである。⁽⁴⁵⁾この引用箇所は、ザイベルという名の男性が近所の顔見知りの子どもを殺害する瞬間を記述したものだ。心を病んでいたことよりも、突発的に殺害行為に及んだその異常さの暴発を強調するような語りである。

この記事はザイベルの個人史でもあった。彼が四歳から二二歳までポツダムの孤児院で過ごしたこと。孤児院にいた頃は、喜んでいることよりも悲しんでいることの方が長かったこと。仕立屋として仕事を習い覚えたが、しばしば突発的な激昂状態に見舞われ、そしてメランコリーに悩むこともあったこと、わずかな借金もあったこと、こうした日々の不安を教会での祈りでなくさめていたこと、そして子どもに対してはいつも優しく接していたことなど、この記事を手取る者は、彼の発症にいたるまでの経緯と、普段の彼の性格や彼のお

かれてきた境遇について知ることになる。第四号一巻では、再度ザイベルの記事について言及されており、「ザイベルは、生きることへの疲れから子どもを殺害した。」「…この生きることへの疲れもまた、格別の注意が向けられるに値するあるひとつの心の病である」と説明⁽⁴⁶⁾されている。

もうひとつの例として、第一巻二号に収録された学業ならびに友人との付き合いのどちらもうまくいかない一五歳の少年の記事を紹介しておこう。

「その少年はふさぎ込んだ憂鬱そうな人物にみえた。スケッチの時間、かれは絵を描くことなく、先のまるまったペンとニンジン握っていた。そしてかれはニンジン握を机にすえると、一気に上の部分を切り落とした。その日以来、少年は異様におおきなナイフを常に携帯するようになった。」「…」次第にこの少年は級友たちの会話にも応じることがなくなり、ひどい憂鬱に襲われているようだった。」「…」彼を刺激しないようにするのがよいと周囲も思うようになり、級友たちは次第に彼から離れていった。しばらくたつたこと、かれは、机に向かい、紙に絞首台のようなものを描くと、ナイフをもって自分の首と胸にあてた。そしてため息をついて、以前からこうしようと思っていたんだと語り、その原因は両親にあるとも付け加えた。そして何人かの級友そしてフランス語教師をナイフで脅⁽⁴⁷⁾した」。

引用した部分は、少年がナイフを振り回して騒ぐクライマックスにあたるが、やはりこの少年についての記事もまた、彼の学校での様子、彼の性格の観察が記録されている。

紹介したふたつの記事に共通しているのは次の二点であろう。まず記述の大半が、人物の日頃の様子にあてられているという点だ。これは『経験心理の学』に掲載される記事がある人物の歴史つまり個人史でなければならぬというすでに確認した告知文の内容に合致している。そしてもうひとつの共通点が、殺人そしてナイフによる脅しのような殺害行為や危険行為を病の発症ないしはクライマックスとして記録している点だ。もちろん『経験心理の学』に収録されているすべての病の記録、たとえば日記や伝記の類いが、かならずしも危険行為に帰着するわけではない。しかしなぜこのような危険行為が心の病として報告されることになったのか、その理由について確認しておく必要がある。雑誌のなかの次の記述が手がかりとなる。

「貪欲さ、浪費、賭博癖、嫉み、無精、虚栄心などといったものを、心の能力の病または心の病のうちに数え入れることにひとびとはいまだ慣れておらず、もちろんこれらの病の処置について思案することにも慣れていない」⁽⁴⁸⁾。

この引用は心の病についての同時代の理解不足への批判を述べた箇所にあたる。つまり浪費癖や賭博癖のような悪癖と呼ばれるようなもの、そして嫉みや虚栄心のようなある状況下におかれて抱いてしまう感情もまた心の病であって、それぞれ病として対処されなければならないという主張であった。もちろんここで、これらの症状に依存症やパーソナリティ障害といった病名を当てはめて、『経験心理の学』の先見性をあらためて評価することも可能である。しかしここで着目したのは、殺人行為や危険行為を頂点に、悪癖と呼ばれるような素行が心の病の判断基準として利用されていることだ。ここで突き合わせてみたいのは、ミッシェル・フーコーの主張だ。『狂気の歴史』のなかでフーコーは、狂気の分類の秩序は狂気の外からもたらされなければならなかったと指摘し、その外の秩序は人間の性格であったと論じている。⁽⁴⁹⁾フーコーによれば狂気という病気の諸形態を探し求めた末に見いだされたのは道徳生活上のゆがみであった。⁽⁵⁰⁾このフーコーの主張は、この悪癖や感情が心の病の定義に利用されていること、つまり心の病という疾患分類が確定していなかった時代においては、心の病は道徳的規範からの逸脱を手がかりに定義が試みられていたことを指摘するものであった。この指摘を引き受けるならば、子ども殺しやナイフによる恐喝のような危険行為は、心の病を可視化するために必要不可欠な極端な不道徳な行為であったということ、別の言い方をすれば、こうした危険行為こそが心の病の症例として受けとられていたということになる。

Ⅲ・社会改善

『経験心理の学』において、子ども殺しの犯罪者や学校でナイフを振り回す少年が心の病の症例として扱われていたことの原因を、同時代の社会的なコンテキストからも検討してみることにした。まずテオドール・ズイオルコウスキーの指摘が糸口となる。ズイオルコウスキーは、『経験心理の学』が発刊されていた時期を、幅広く心の病への関心が高まった時代と認め、それを近代的な医学や自然科学の発展の一段階としてみただけではなく、心の病への関心を、一八世紀後半から緩やかにおこなわれてきた社会改善の試みとして位置づける可能性を示唆している。⁽⁵¹⁾このような心の病への医学的関心と、社会の変革とが重ね合っている地点が、心の病をわずらった人を専門に扱う医療制度の成立であり、その最初の一步として、病人、犯罪者、貧民たちを収容していた懲治院 (Zuchtthaus) の改革が提言された。

麻の実をとるための突き棒、食堂の大きなパンとそれを切るためのナイフ、汚物にまみれた足、窓についた四角い小窓からみえる、

(染料をとるために) スオウを砕く人たち、大きな織り機、縫い物をする部屋、教会、指示に耳をかさない人につかう鉄製のトゲのついた拘束具⁽⁵²⁾

これらは旅行記に残された一八世紀中葉のハンブルクの懲治院の様子を伝える記述である。⁽⁵³⁾ 懲治院とは、孤児、寡婦、病人、犯罪者など、放置しておいたら社会的な不安を引き起こすような人々をあらかじめ囲い込むための施設であった。懲治院のこのような性格は、選定侯国ザクセンで発布された一連の法令からもうかがうことができる。一五八〇年に発布された法令にて、社会秩序を回復させるための君主の配慮から、懲治院をヴァルトハイムに設置して以降、そこに収容すべき人々は時代に応じて追加されていった。一六世紀末になると、病人、物乞い、貧民、放浪者、不品行な人々を収容、一七世紀中葉には、健常であるのに働かない物乞い、ジプシー、(建物の改修などの仕事があれば住み込みで働き、放浪と散財を重ねていた) 職人の若造そして水車小屋の人夫、⁽⁵⁴⁾ 盗賊、殺人者も収容するよう定められた。ヴァルトハイムの懲治院に一七一六年時点で収容されていた一八二名については、その名前と簡単な経歴そして収監理由が書き残されている。⁽⁵⁵⁾ この名簿からは、法令で収容が定められた上記の人々に加えて、元傭兵、放火犯、全盲の男、旅券不所持の女とその子ども、売春婦、正当な婚姻関係なしで生まれた荣誉なしの子、傭兵の寡婦とその子ども、不信心者、癩病患者、メラニコリー患者が収容されていたことが確認できる。

犯罪者は言うまでもないことだが、病人や貧民、そして職業不定で定住地をもたず各地を点々とする若者たち、こうした一群の人々は保護が受けられなければ、更なる犯罪をひきおこしかねない危険人物であった。ヴァルトハイムには退役した元傭兵(ならびに傭兵の寡婦)が少なからず収容されていたことがわかっているが、三十年戦争締結後におとずれた一時的な安定状態のもと、ドイツ各地では退役傭兵による犯罪が増加した。火器を扱うことに手慣れた元傭兵たちはとりわけ監視を必要とする対象であった。

『経験心理の学』に懲治院を主題的に扱った記事はない。例外的に、第二巻二号に、収監前に営んでいた仕事を施設内でも継続させることで矯正したイギリス人についての短い報告が掲載されており、労働こそが人間を矯正する近道とまとめられている。⁽⁵⁶⁾ ただし第二期編集主幹のカール・フリードリヒ・ポッケルスは、『経験心理の学』とは別の媒体であるが、ツェレの懲治院ならびに狂人収容施設の「きわめて惨めな恐ろしい身の毛のよだつ光景」を、「汚物のひどい匂い」に襲われながら書き留めている。

「わたしたちが広いホールに足を踏み入れると、他の懲治院と同じように、物静かな狂人たちは理性を有する者たちにまじって食事を

していた。しかしこれらの汚いがつがつした獣のような食べ方は、私がここで目にした狂人たちの光景のなかで、もつとも嫌悪感を抱かせるものであった⁽⁵⁷⁾。嫌悪感を抱きながらも、心の病を扱う雑誌の編集者は、その病に患う人々を書きとめずにはいらなかったようだ。驚くべきスピードで話をする男、肌着一枚もまともな陰部をみせつける女性⁽⁵⁸⁾、目の前の作業台の動きに合わせて、立ったり座ったりをただ繰り返し続ける男など、心の病を患った人々を収監する独房の続く「悲惨な街路」⁽⁵⁹⁾を歩きながら、ポツケルスは狂人たちひとりひとりについて対話を試みその病のありようを詳細に記録している。

こうした狂人たちの描写とあわせて、ポツケルスは、施設の問題点も指摘していた。「地獄へと至る途上「悲惨な懲治院のこと」にいてことで、彼らは人間社会から消えてしまっている。わずかであれ理性が残っている人がいるとしても、多くの荒れ狂う者たちのそばにいてことで、そのわずかな理性も失ってしまうことであろう。というのも神経を構成しているものなかのいくつかの身体器官は、狂気を発症するために備わっており、この種の心の病は容易に隣人に感染することは十分に知られたことなのだ⁽⁶⁰⁾」。

人間には狂気を発症する神経器官が備わっており、狂人と接することでまさに感染するかのようにならぬ人間も狂気に陥るといふポツケルスの説については、のちほど本論で検討するが、ポツケルスは、心の病を患っている狂人と、それ以外の理性を保っている孤児や貧民や犯罪者とをいっしょくたに収容することを批判していた。

狂人、孤児、病人、犯罪者を区別せずに扱うことへの批判は、ジョン・ハワードやジョン・マクファーランらイギリス論客からの影響を受けて、一八世紀中葉以降、ドイツでも高まりを見せる。ハインリヒ・バルタザール・ヴァグニッツは、ハワードに影響を受けて、ドイツの懲治院を実際に訪問し、その現状を三巻からなる詳細なレポート⁽⁶¹⁾のかたちでまとめた。ヴァグニッツが、ドイツの懲治院の改善点として指摘したのが、居住環境の狭さや衛生環境の劣悪さ、監禁器具の危険性、そしてなにより男女の区別なく、犯罪者、病人、孤児をまぜこぜに収容している点であった。「一般的にいつて、狂人たちは、まったくもって省みられてはいないことが多い⁽⁶²⁾」。医療的な対処を必要とする人々には医療を施し、孤児たちには教育そして仕事を教え、犯罪者には（キリスト教的な）改心と矯正とを期待する。収容されていた人々の分化をヴァグニッツは強く求めた。

ヴァグニッツは、さきほどの懲治院の報告書とは別の論考のなかで、懲治院の社会的な役割は人間を改善させる点にあると主張している。そのための具体的な方策としては、日々のキリスト教的な実践を通してまず敬虔さを身に付けさせて倫理的な腐敗を取り除き、貧民

には援助、働ける人材には労働の機会を提供する。そして孤児には教育を施して立派な大人へと育て上げる。この懲治院の役割を実現するためにヴァグニッツが強く求めたのが、ふさわしい看守役を育成し各地の懲治院に配置することであった。

ともかくにも「看守役の育成は必要不可欠なもの」⁽⁶³⁾である。というのも「人間の感受能力、考える能力は、どのようにしたら改善されるのか考えてみればよい。怖がらせたり殴ったりしても改善は実現しない、改善しうる人間は、このような処遇をうけると、むしろ悪くなってしまうこともある。人間の心を良く知る者が助けとならないということがあろうか、人間の心を知る者の見解が改善を必要とする人間の扱いを決めるために役立つだろうか。[...]本来こうした懲治院にいるのは粗野な人間だ、こうした場所にいるこうした人間は、人間をよく知る者の監視下におかれるべきではないだろうか」⁽⁶⁴⁾

こうしたヴァグニッツの主張の眼目は、懲治院が社会不安をひきおこす危険人物を收容し、同時に彼らを改善させるための施設として機能するためには、従来のように、危険人物を社会から隔離して強制的に労働させ、聖書の文言を暗記させ頭ごなしに改心させることではその目的は達成しえないという旧来の懲治院への批判にあつたのは明らかだ。人間を改善させるためには、制度や環境の改善は当然のこと、人間の心を熟知する人材によるケアが必要とヴァグニッツは考えていたといえるだろう。

こうした社会改善をめざした動きを考慮にいとみると、子ども殺しの犯罪者や学校でナイフを振り回す少年のような危険人物が引き起こす犯罪や事件をデータとして収録する『経験心理の学』が、人間の矯正を促進するための媒体であつたことに気が付くだろう。つまり誌上で収集提供された社会不安をあたえる人々のデータは、看守のような人間の心を熟知する人材を育成するための教材としても活用されたと考えてみることができるのだ。もちろんこうした明確な社会改善への目的意識はなくとも、『経験心理の学』の読書経験には、心の病についての知見が得られるという単なる医学的な知見の獲得にはとどまらない、読者が道徳的な人間改善というプロセスへと巻き込まれるという側面が含まれていた。『経験心理の学』の読書経験をとりだすためにも、犯罪者についての報告に類される一連の言説を再検討してみることにはしたい。

IV. 病と犯罪とのつながりについて、

まず犯罪者についての報告がひとつの書籍ジャンルとして確立されていたことから確認しておきたい。そのために『経験心理の学』第

三巻二号に収録されている殺人犯ヤーコプ・ファルマイアの記事を紹介しよう。ファルマイアは、聖書の黙示録にひどく影響された殺人犯として報告されている。ファルマイアは一七世紀初頭に実在した法学者であり、メクレンブルクの貴族グラボウ家の宮廷顧問官に任じられた人物である。この殺人者についての記事は、残された裁判記録をもとに再構成された一種の伝記文学のような体裁をとった報告となっている。

ファルマイアは、子どもの頃からはつきりと、その性格は兄弟たちとは異なっており、ひどい憂鬱的な気質であり、日頃から不安な考えにとらえられては眠りにつけないことも多々あった。⁽⁶⁵⁾そして時は三十年戦争、すでに顧問官の職に就いていたファルマイアの生活に大きな変化がおとずれる。ロストックの広場^{マルクト}に面したファルマイアの自邸が、皇帝軍のフォン・ハッツフェルト司令官の住居として明け渡されることになった。彼はすぐさま、自身の法務の経験を活かしてこの命令に対する不服を申し立てる。しかし彼の陳情は一向に功を奏すことはなかった。⁽⁶⁶⁾

「一六三二年一月二〇日木曜日の夜二二時、暗然たる戦いが続いた時期だからであろう、ヤーコプ・ファルマイアは、ハッツフェルト司令官の即座の死を神が望んでいるという考えにとらわれて目を覚ました。呵責にさいなまれながらも、この殺害行為はファルマイア自身によってとりおこなわれなければならないという神の靈感に、ファルマイアは次第に支配されていった」⁽⁶⁷⁾。ファルマイアは司令官を殺害するという恐ろしい考えをなんとか抑えるために、一心に神に祈りをささげ、聖書を真剣に読むことにした。しかしユーデイト書を読んでいるとき、ホロフェルネスの首を斬るユーデイトと、自分の姿とが重なりあってしまったことに恐怖を覚えた。⁽⁶⁸⁾この恐ろしい姿を抑え込もうと、ファルマイアは神に祈りを捧げ続けたが、翌一月二二日の早朝、この日に殺害が行われなければならないという衝動で目を覚し、早朝六時にフォン・ハッツフェルト宅を訪問して彼を殺害した。⁽⁶⁹⁾

残された裁判記録から再構成された犯罪者の自伝と聞いて思いたすのが、シラーの小説『不名誉からの殺人』であろう。この小説は、クリスチャン・ヴォルフという安宿の少年が、恋心を抱いていた女性の気を引くために犯したひとつの軽微な盗みから、犯罪者という烙印を押され、各地で指名手配される盗賊団の残忍な首領へと転落していく様を描いた伝記的小説である。⁽⁷⁰⁾この作品もまた、シラーがギムナジウム時代、教師アーベルから聞かされた実際に起きた事件の裁判（アーベルの父がこの犯罪者の尋問に関与していた）に触発され作成されたものであることは良く知られている。⁽⁷¹⁾

この小説の冒頭にシラーは次のような言葉を寄せていた。「歴史の研究が市民生活にとって依然としてなんの効果も与えない理由はここににある。「小説に登場する」行為する人間の激しい心情の動きと、その行為を前にしている読者の平静な気分との間には、著しく相反した大きな隔たりが横たわっており、読者が主人公の行為の理由のつながりを察することは不可能だ」。(72) それゆえ、「主人公は読者と同じく冷静でなければならぬ、ないしは私たちがその行為にいたるまでのこの不幸な主人公のことを知らなければならぬ、つまりわれわれは彼がただその行為を完結する点を見るだけではなくて、行為をおこそうとする彼を見なければならぬ。彼の行動よりも彼が抱く思いの方が、われわれにとつては重要なのだ。彼の行為の結末よりも、その原因たる彼の思いのほうがはるかに重要なのである」。(73)

これは小説の本筋がはじまる前の、作者シラーによる前口上にあたる部分からの引用である。ここには、登場人物の行為ではなく行為にいたるまでの彼の考え、つまりその行為の原因たる主人公の心のうちの方が重要だとするシラーの主張がはっきりと示されている。主人公の心を描き出すために、シラーは主人公ヴォルフの生い立ちから書きはじめている。幼少の頃にその醜い容姿を嘲笑され続け、最初の盗みを犯したあと、村の共同体への帰属を求めながらも常に排除され続けた主人公の孤独感。窃盗団に迎えられるはじめて仲間から慕われることを経験をし、そして密入国者として拘束された時に受けた人間的な扱いにはじめて人の優しさを感じる場面と、初犯から殺人を犯しそして処刑されるまでの主人公の気持ちの変化に重点を置いた小説としてシラーはまとめあげている。

シラーがこのようなタイプの小説を執筆するにあたって参考にしたジャンルがふたつある。ひとつは当時の悪漢小説である。シラーの戯曲作家としての名声を確立せしめた『群盗』もまた、盗賊の首領を主人公としたものであった。そしてもうひとつが、判例集とりわけドイツで盛んに受容されていたピタヴァルに端を発する判例集であった。

判例集とは、文字通り犯罪者の裁判の記録であるが、フランスのデ・ピタヴァルによる判例集はドイツでも複数の訳本がでるほど熱心に受容されていた。このような裁判記録には、ミッシェル・フーコーが編纂した『ピエール・リヴィエールの犯罪』を読んでもわかるように、犯罪者が犯罪にいたるまでの経緯や目撃者の証言、そして犯罪者の自白記録がおさめられていた。もちろんこうした裁判記録が収集されたそもその目的は、「事案を知らずして推論を重ねれば誤審を招くのは確実」(75) という実務への対応、つまり実際の裁判において参考となる判例を収集することにあつた。(76) しかし判例集は、この本来の目的とはかけ離れて、犯罪者の一生の物語つまりその経歴や犯罪をひきおこした動機をひとつの物語として提供する読み物として受け入れられていた。

犯罪者の人生の記録が、小説と同じように一般の読者を魅了することに着目したのが、シラーであった。シラーはこの判例集を読み物として磨き上げるために、ピタヴァルの判例集のあらたな翻訳集も企てていた。「この新翻訳という」あらたな装丁を施すにあたり、読者の要求を勘案するならば、法律理解に役立つ原著に含まれた法律関連の記述をそのままとどめておくことは、本訳書がめざす目的に反することになるのではないだろうか。新翻訳者によってこうした部分が割愛されることによっても、収録された話はその完全さを失うことなど全くなく、むしろ読者の関心を獲得することになることであろう。⁽⁷⁷⁾

このように、シラーが判例集に期待していたのは、裁判についての専門的な手続きを含めた判例としての役割ではなく、「感情の隠された戯れがわたしたちの眼前にあらわれ、そして覆い隠された策略や心をまどわす即物的な詐欺のからくりが明らかになってくる」⁽⁷⁸⁾点であった。その意味でシラーの『名譽からの犯罪者』は、裁判記録から小説への翻案を自ら実践してみせたものであったといえるだろう。

そしてまた判例集がなによりもまず犯罪者のような道徳的に逸脱した人間への読者の関心に応えたジャンルであったことを念頭においてみる必要がある。こうした読者の関心は、犯罪者だけにとどまらず、自殺者の伝記集や狂人の伝記集といったアンソロジーが当時多数編まれたことになる要因でもあった。この種のアンソロジーは多数確認できるが、なかでもアウグスト・ゴットリーブ・マイスナーの『スケッチ』にあさめられ、のちに『犯罪者たち』にまとめられることになった犯罪者たちのエピソード集。それからクリスチャン・ハインリヒ・シュピースの、『自殺者たちの伝記』⁽⁷⁹⁾そして『狂人たちの伝記』⁽⁸⁰⁾が有名である。

『犯罪者たち』の序文で著者のマイスナーは、収録している犯罪者談が創作ではないと断言している。基となる裁判記録の穴を埋めるために、口伝えの情報を頼りにしている箇所もないわけではないが、⁽⁸²⁾ノヴェレではないと念をおす。マイスナーによれば、このアンソロジーには、「いろいろな点からみて、人間の心の興味深い道程が示されていないような、そのような話は載っていないと思います」⁽⁸³⁾。この直訳調の引用を敷衍すれば、『犯罪者たち』の読者は、収録されたどの逸話を読んでも、ある人間が犯罪を犯すまでの心の道程をたどることができる。とマイスナーは約束していることになるだろう。これはシラーがピタヴァルの判例集の改訳そして自ら『名譽からの犯罪者』で実現しようとした効果、つまり犯罪行為ではなく犯罪を犯すまでのプロセスを読み取らせようとするのと同じ効果を狙ったものといえる。⁽⁸⁴⁾

あわせて心の病を患う人間たちのエピソードを集めたシュピース編集による『狂人たちの伝記』も簡単に紹介しておこう。このアンソ

ロジャーには全四巻に一八人の狂人の伝記がおさめられている。それぞれのエピソードの長さは一定しておらず、基にした資料に起因するのであろう、話の込み入り具合もまちまちである。とはいえゴシック小説の人気作家としてしられたシュピースが手がけたアンソロジーは、史実に基づいているとはいえ、なによりも読み物としての質を維持するために創作が加えられていることは明らかだ。例えば、全編にみられる登場人物の会話がセリフとして戯曲風に再構成されている箇所は、こうした創作の跡を顕著に示すものである。

例えば二巻に収録されているユダヤ人女性エステル・Lの伝記は、エステルの狂気そのものよりも、そのドラマティックな話の展開に創作意欲が注がれた作品といえるだろう。筋を簡単に紹介しておこう。キリスト教徒の恋人と宗教を理由に結婚ができなかったユダヤ人女性エステルは、その後、父の死去により莫大な遺産を引き継ぎ、カトリックへ改宗し修道院に入る。そこにかつての恋人は偶然にもエステルを見つけると、彼女を修道院から連れ出した。彼女は再度プロテスタントに改宗して、ふたりはめでたく結婚、子どもを授かる。しかし彼女の妊娠中に夫はふっかけられた決闘で命を落とす。彼女が引き継いだ遺産を目当てにかつての修道院の尼僧たちは、エステルを軟禁することになる。無事に生まれてきた子どもは、尼僧たちの奸計で修道院の外の乳母に渡されてしまった。子どもを殺されたと勘違いしたエステルは「何日も高熱を患い」、「憤怒の念は、ついに狂気へと姿を変え、この狂気は彼女の想像力を狂わせることになる」⁽⁸⁴⁾。「彼女は肌着やぼろ布で赤ん坊をつくり、それを丹念に世話するようになった」⁽⁸⁵⁾。狂気を発症したエステルは、外に出る自由を完全に奪われたが、哀れに思った侯爵夫人が居城に彼女を引き取るようになった。エステルは死後二日前に、完全に正気に戻ったとされるが、肺炎でこの世を去ることになるというドラマ仕立てだ。

当時の書評をみても、シュピースのこのアンソロジーについては、その「まったくもって手の込んだ、故意に心を震わせるような箇所」の認められる、作り話半分の詳細さに欠いた書きぶり⁽⁸⁶⁾が批判されていた。しかし問題は、シラー、マイスナー、シュピースの作品が、ノンフィクションであるのかそれともフィクションであるのかを特定することにあるのではない。確認しておくべきことは、犯罪者や狂人の伝記が読み物として提供され、当時の読者たちに受容されていたという点だ。書評でもそのフィクション性が指摘されていたように、当時の読者たちは、犯罪者や狂人を主人公とする小説を文学的な創作物と認めたくて享受していたのかもしれない、しかしシュピースは、『狂人たちの伝記』の序文で、こうした創作物の必要性を次のように説明していたことの意味を理解する必要があるだろう。

「狂気は確かにひどいものです。しかしもっとひどいのは、人々があまりにも簡単にこの狂気の犠牲になってしまうことなのです。

「……こうした不幸な者たちの伝記をみなさんにお伝えするのは、みなさんの同情を誘いたいという理由からだけではありません、わたしがみなさんに示したいのは、みなさん自身がこうした不幸の原因となることもあるということ、そしてまたこの不幸を防ぐのもまた、わたしたち次第ということなのです」⁽⁸⁷⁾。

この類いのアンソロジが、娯楽として受容されていたことは言うまでもないが、同時に、狂気に陥らないための教育的な処方箋の役割も果たしていたことをこの引用から読み取ることができるだろう。狂人たちの伝記を読むことで、日常生活に潜む狂気へ陥る要因を知ることができる。その要因を事前に熟知していることで、人々は狂気を回避できるというのだ。しかし小説を読むことで回避できるような狂気とはどういうものなのであろうか。道徳的な逸脱によって病として可視化され、読書によって予防できる狂気とはどのような心の病なのだろうか。いまいちど一八世紀の人々が抱いていた心の病の像について確認することにしよう。

V・心の病とその養生

シュピースは、狂人の生涯を編んだ『狂人たちの伝記』に、狂気に陥ることを防ぐ教育的な役割を認めていた。しかしそうした教育的な配慮が功を奏するには、狂気についての特定の理解が共有されている必要があった。つまり狂気が、誰もが容易に陥ってしまうような病とみなされていたからこそ、こうした予防線としての役割が狂人や犯罪者の伝記には認められていたわけである。

テイソーは『神経とその病気についての論考』⁽⁸⁸⁾は、このような狂気理解の手がかりを与えてくれる。この著作のなかでテイソーは、狂気やメランコリーをはじめとして、利己心や浪費といった性格や癖もまたひと括りに、神経に由来する病として論じている。『経験心理の学』でもまた、狂気と浪費癖や怠惰癖が同じ心の病とみなされていたことはすでに述べた通りであるが、このような病の理解には、テイソーの理論のようなものが下敷きとなっていたといえるだろう。テイソーの説明によれば、こうした神経の病は、生まれ持った神経の欠陥が原因となつて、または身体の欠陥が原因となつて発症するものであるが、同時にまた居住地域の気候や食べ物、生活習慣もまた神経の病をひきおこすことがある。こうした広い意味での生活環境に起因する神経の病は、テイソーによれば、時代病と診断されるべきものであった。「恐れずに言わせてもらえば、この種の病気は、以前はまったく稀なものであったが、昨今とりわけ都市において顕著にみられる」⁽⁹¹⁾。

では具体的に都会の生活の何が病の原因になるのか、テイソーによれば、贅沢で快適な食生活、身体をあまり動かさない室内を中心とした活動、そして夜更かしの三点⁽⁹²⁾である。具体的には、スパイスを多用した食事にコーヒーの多飲、例えばデスクワークや読書が象徴するような屋内での仕事や余暇、快適さの証拠である温水の常用、そして暖房の効いた室内環境などである。テイソーは、神経の病が、このような生活環境や生活習慣といった偶発的な要因によって引き起こされるものであると説明する。しかしそれは同時に、神経の病は、食生活や生活リズムの改善によって回復できるものとみなされていたことを意味していた。心の病は、ちょっとした心の不調のようなものであり、むしろ健常と病の間には明確な区別はなく、むしろ程度の問題、健常な状態からの逸脱またはズレの度合いのようなものとして考えられていたということになるだろう。

テイソーの神経の病の原因についての解説を引き受けるならば、心の病は、そう簡単に完治されない稀な大病ではなく、もっと身近な、誰もが不注意で陥ってしまうような病ということになる。例えばポツケルスは、人間には狂気に陥る器官が備わっていると記しているが、それもまた、人間がだれしも狂気に陥る可能性があることを認めた発言ということになるだろう。誰もが患う可能性があるとする心の病の同時代の理解を背景に置くことで、『経験心理の学』のなかで「心の養生学」という項目が設定されなければならなかった理由もはつきりしてくる。心の病は養生することで十分防ぐことのできる病であったわけだ。

そもそも「心の養生」という表現も宗教的な意味合いで使われていたものだった。信仰への揺らぎからくる不安を抑えたり、死を前にしての心の平穏を保つたりして、「心穏やかに幸福に暮す」⁽⁹³⁾ことを目指す心の指針という意味が心の養生には込められていた。しかし『経験心理の学』では、心の養生は、心の病を防ぐための心への配慮という意味で用いられている。心の養生とは、もじどおり、「心の健康な状態を維持する」⁽⁹⁴⁾ことにあるが、この心の健康状態の維持とは、心の諸能力の調和または釣り合いを保つことにある。おかしくなつてしまった心を治すのが治療の術だとすれば、心の養生とは、「心の諸能力の目的に反したまたは無秩序な使い方を抑えるような規則」⁽⁹⁵⁾を身に付けることを意味した。ただし心の状態はその人それぞれであるのだから、まずは「自分の心の状態を子細に観察することで人それぞれの養生の仕方を見つける」⁽⁹⁶⁾、それと同時に「人間の心には各人に共通の類似点も多くあるのだから、私たちの経験を互いに伝えあうことで、誰にでも一定の効果をもつであろう、一般的な養生の規則をみつけることも不可能ではない」⁽⁹⁷⁾と説明されている。

しかし実際『経験心理の学』の刊行が始まってみると、この養生の項目に類される記事は集められることはなかった。しかしこれは養

生という問題設定がまちがっていたからではない。むしろ『経験心理の学』に集められた伝記、日記、子どもたちの観察記録といった雑多なデータのすべてが、心の養生という目的に益する経験を提供することになったからである。当時の読者たちは、『経験心理の学』に収録された記事を読むことで、健康状態から病へのズレ、ちょっとしたことで病を患う心の振幅を敏感に読み取っていたのであり、同時にこの読書経験によって、読者たちは心の養生という実践へと参入していったのである。

養生という形で心へのかかわり、それは具体的には、心の奥へと向かうことであつた。「私たちは、時計の針がまわるところは良くみている、しかしその内部の仕組みについては知らない。おなじように私たちは、ある人の行為の端緒が、彼の心の最も深いところで、どう展開してくるのを見ることはない」。(98) これはモーリッツが、創刊に先だつて『経験心理の学』の必要性を説いた短論文のなかでの主張していたことである。時計の機構という比喩でもって語られるような行為のメカニズムが働く場として心を眺めることは、判例集や犯罪者の小説を読むことに通じるといえるだろう。しかしそれではどうやって人はこの心の深みへと目を向けることができるようになるのだろうか。

「自ら人間の観察者となろうとするものは、自分自身から出発することになる。第一に自分自身の心の歴史を、自分の最もふるい子どもの時分からできるだけ忠実に描き出すこと、もつとも昔の子ども時分の想い出に注意を向けること、何であれ意味なきものと考えてはならない」。(99) 「…このようにして人間の観察者は、自分自身から出発して、徐々に、子どもたち、若者たち、大人たち、年寄りたちの、表情、言葉、行為の観察へと進まなければならない」。(100)

行為に先立つ心の仕組みを解き明かすこの試みは、まず自らが心の内を観察することからはじめられる。母親に抱かれて見たとおもわれるある街の風景、子どもの頃の住居のおぼろげな記憶、よくわからない色や形の断片。こうした断片が書き連ねられている子ども時代の記憶をあつかった記事は、読者が自分自身の心をのぞき込むための手引きとしての役割をはたしていたといえる。そして自らの心の奥底をながめた者は、次に他者の心の奥へと眼差しを向けることになる。

心の奥へと向けられたまなざしが自分自身に向けられているのか、それとも他者に向けられているのかというまなざしのベクトルの違いも確かに重要ではあるが、忘れずに確認しておきたいのは、自分自身でさえ知りえない、想起によってはじめて語られるような内奥が自分にはあるということ。そして自分のものとは決定的に異なり、容易には伺い知ることのできない別の内奥をもつ存在として他者とい

うものが立ち現れてきていることである。そして重要なのは、この心の奥底を眺めるまなざしが教育と重ね合わされて実践されていたことだ。

『経験心理の学』が観察者として想定しているのは、意外なことに医師ではない。理想的な観察者として示されているのは教師であった。「学校教師そして教育者は、人間を観察するための多数の機会を持つている。というのも子どもたちは、大人たちのようにうわべを装う術をまだそれほど身に付けてはいないからだ。教育者は、その観察対象を絶えず観察できるという利点をもっている。また学校教師はその観察対象が多様という利点がある」⁽¹⁰²⁾。義務教育のなかった時代のこと、教師とは区別されて呼ばれる教育者とは、住み込みで貴族や市民の子どもを教育する家庭教師のような職種のことをさしているのだろう。子どもと長い時間接する教師という職種は、人間観察に適任で、また観察の対象となる子どももまた、うわべを装うことはしないので、観察の対象として最適ということなのだ。そして教師は、子どもの信頼をまず勝ち得て、そして子どもにも悟られることのないよう、かれらの観察記録をつけ続けることが奨励された。⁽¹⁰³⁾

このように学校のような教育の現場が人間観察の理想的なモデルとして提示されていることの意味を考えてみる必要がある。教育の世紀と呼ばれた一八世紀は、全人格的な教育への関心に突き動かされて、教育制度の整備や教育内容の向上がはかられた時代であった。しかし同時にこの教育の場は、心を観察するまなざしによっても支えられたものでもあったということになる。子どもたちの心の深奥へと関心が向けられる教育現場は、社会不安の芽を若いうちに摘み取ろうとする鋭い監視の目がはりめぐらされた場であり、そしてまた教育の不適合者を心の病つまり不道德や怠惰のような悪癖として処置または矯正することを可能とする場でもあった。そしてまたこの心へのかかわりが、自らの心への自己反省という構造をとっていることからわかるように、教育を受ける子どもたちは、みずからの行為について第三者の視点にたつて自己観察するような内面の統制状態におかれることになった。こうした監視や規律の意味については、別の機会にあらためて論じることにするが、例えばこの時期には、教育における賞罰についての複数の論考が発表されていた。⁽¹⁰⁴⁾この論争は、教師と生徒の関係について同時代的な視点から反省する試みであり、当時の教育の理想像を伝える格好の史料である。これら一連の論争もまた、教育の狭義のコンテクストにしばられるものではなく、子どもの心へと向けられたまなざし、子どもの心の矯正というコンテクストにおいて再解釈することで18世紀の教育環境のいままで気付かなかった役割があきらかになるはずである。

注

- (1) Immanuel Kant, *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, 2. Aufl., Königsberg 1800, Vorrede.
- (2) Johann Georg Sulzer, *Allgemeine Theorie der Schönen Künste*, 2. Bd., Leipzig 1774, S.918.
- (3) Johann Casper Lavater, *Physiognomische Fragmente, zur Beförderung der Menschenkenntniß und Menschenliebe*, 1. Bd., Leipzig und Winterthur 1775, S.33.
- (4) 人間学と市民的自己意識との関係について。Günther Mensching, *Vernunft und Selbstbehauptung. Zum Begriff der Seele in der europäischen Aufklärung*, in: Gerd Jüttemann, Michael Sonntag, Christoph Wulf (Hrsg.), *Die Seele - Ihre Geschichte im Abendland*, Göttingen, 1991, S.217-235.
- (5) 心身問題としての心と身体の問題「人間全体への関心について」は下記を参照(シ)す。Hans-Jürgen Schings (Hrsg.), *Der ganze Mensch*, Stuttgart, Weimar 1994.
- (6) Ernst Platner, *Anthropologie für Aerzte und Weltweise*, 1. Th., Leipzig 1772, S. IV.
- (7) August Hermann Niemeyer, *Grundsätze der Erziehung und des Unterrichts*, 2. Aufl., Leipzig 1799, S.36.
- (8) ザロモン・マイモンが編集主幹を務めた最後の三年間(第八巻、九巻、一〇巻)には、マイモン自身が執筆した哲学論文が収録されるようになる。
- (9) 最近の研究としては下記のものがあふ。Vgl. Georg Eckardt, Matthias John, Emilio van Zanwijk, Paul Ziche, *Anthropologie und empirische Psychologie um 1800*, Köln, Weimar, Wien 2001, S.134ff.
- (10) Hans Först, Mathias Angermeyer, Robert Howard, *Karl Philipp Moritz Journal of Empirical Psychology (1783-1793) - an analysis of 124 case reports*, in: *Psychological Medicine*, 21, 1991, pp.299-304.
- (11) ベルの分類 (Matthew Bell, *The German Tradition of Psychology in Literature and Thought 1700-1840*, Cambridge 2005, p.96) : 一二の分類の内訳は以下の通り : 一 教師の視点からの子どもの性格描写、二 大人の性格描写、三 尋常ではない夢の報告、四 ヒステリー、五 パラノイアまたは心気症、六 想像力の錯乱、七 無気力、八 言語使用や言語習得について、九 否定的な自己経験に由来する犯罪、一〇 自殺、一一 予知、一二 臨終での体験

- (12) Georg Eckhard, Matthias John, Temilo van Zantwijk, Paul Ziche (Hgg.), a. a. O.
- (13) Karl Philipp Moritz, Karl Friedrich Pockels, Salomon maimon, (Hgg.), *Gnothi santon oder Magazin zur Erfahrungsselenkunde*, Berlin 1783-1793.
- (14) Vgl. Gunter Mann, *Organ der Seele - Selenorgane: Kramioskopie, Gehirnatomie und die Geisteskrankheiten in der Goethezeit*, in: Gunter Mann und Franz Dumont (Hgg.), *Gehirn - Nerven - Seele*, Stuttgart 1988, S.133-158; Olaf Breidbach, *Die Materialisierung des Ichs*, Frankfurt am Main 1997.
- (15) チャネルの概念については、上記の参考文献を参照。Manuela Mei, *Notio intellectus divini quomodo prodet*, in: Michael Albrecht, Lothar Kreimendahl, Martin Mulsov und Friedrich Vollhardt (Hgg.), *Aufklärung*, 23, 2011, S.97-122.
- (16) Christian Wolff, *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen*, Neue Aufl., Halle 1752, S.108.
- (17) Vgl. Wolff, a. a. O., S.122. (29) Vgl. Johann Georg Walch, *Philosophisches Lexicon*, 4.Auf., Leipzig 1775, Sp.1083f.
- (18) Johann gottlob Krügers, *Versuch einer Experimental=Seelenlehre*, Halle und Helmstädt 1756.
- (20) Vgl. Carsten Zelle, *Experimentalseelenlehre und Erfahrungsselenkunde. Zur Unterscheidung von Erfahrung, Beobachtung und Experiment bei Johann Gottlob Krüger und Karl Philipp Moritz*, in: Ders., *Vernünfftige Ärzte*, Tübingen 2001, S.173-185, hier S.179.
- (21) Krügers, a. a. O., S.1. (28) Krügers, a. a. O., S.6.
- (23) Krügers, *Anhang verschiedener Wahnehmungen, welche zur Erläuterung der Seelenlehre dienen*, Halle und Helmstedt 1756, S.4f.
- (24) Krügers, a. a. O., S.10. (25) Krügers, a. a. O., S.86f.
- (26) Johann Nicolaus Tetens, *Philosophische Versuche über die menschliche Natur und ihre Entwicklung*, Leipzig 1777, S.730.
- (27) *Allenneweste Mannigfaltigkeiten*, 1.Jg., 1782, S.775. 同の記事は記事の「上記雑誌にも収録されよう」²⁹。Ankündigung, eines Magazins der Erfahrungsselenkunde, in: *Berlinisches Magazin der Wissenschaften und Künste*, Berlin 1782, S.183-187.
- (28) *Allenneweste Mannigfaltigkeiten*, 1.Jg. (1782), S.775, S.777.
- (29) [Moritz,] *Vorschlag zu einem Magazin einer Erfahrungs-Seelenkunde*, in: *Deutsches Museum*, 1782, 1.Bd., S.485-503, hier S.486.
- (30) *Erfahrungsselenkunde*, 1.Jg., 1.Bd., S.33. (以下、雑誌名と号数については略称を用いる。例えば本引用箇所は「ES, 1-1, S.33」)

- (31) ES, 1-1, S.36. (32) ES, 1-1, S.37. (33) ES, 4-1, S.2.
- (34) [Magdalena Sybylla] *Geistliche Kranken-Apothek*. Stuttgart, 1703.S.3.
- (35) Johann Christoph Maier. *Der Geistlich-Kranken Geistliche oder Seelen-Cur*, Nördlingen 1739, S. 8.
- (36) Anton Michl. *Predigten für das gemeine Volk*, 1Bd. München 1786, S. 7.
- (37) Alexander Chrichton, *Untersuchung über die Natur und den Ursprung der Geistes-Zerrüttung*, mit Anmerkungen und Zusätzen von Johann Christoph Hoffpauer, 2.Aufl., Leipzig 1810, S. 508ff.
- (38) Philippe Pinel, *Philosophisch-Medicinische Abhandlung über Geistesverirrungen oder Manie*, aus dem Französischen übersetzt und mit Anmerkungen versehen von Michael Wagner, Wien 1801, IV.Abschnitt; ヘルマン・シュネン(訳: 影山任佐)『精神病に関わる医学=哲学論』中央洋書出版部 1990' 4章以下を参照(シム)。
- (39) Vincenzo Chiarugi, *Abhandlung über den Wahnsinn überhaupt und insbesondere*, eine freie und mit einigen Anmerkungen versehene Uebersetzung aus dem Italienischen, Leipzig 1795, S.37.
- (40) Immanuel Kant, *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, S.140. 本稿にて参照した第二版ではGemuthsという語がつかわれていたが、それ以降の版では' Seelenkrankheitに置換せられたという(シム) '。同じく心の病という訳語をもてた。
- (41) Kant, a. a. O., S.144-145. (34) Kant, a. a. O., S.144.
- (42) シューベルトの伝記的な情報についてはシムントと参照。Andreas Eichler, G. H. Schubert - ein anderer Humboldt, Niederröhna 2010. また下記の著作では、シューベルトの著作とE.T.A.ホフマンを中心とするドイツ人のロマン派との影響関係がコンパクトに記述されている。Detlef Kremer (Hg.), E.T.A. Hoffmann Leben - Werte - Wirkung, Berlin 2009, S.71ff.
- (44) Vgl. Gotthilf Heinrich Schubert, *Ansichten von der Nachseite der Naturwissenschaft*, Dresden 1808, S.22.
- (45) ES, 1-1, S.29. (46) ES, 4-1, S.11. (47) ES, 1-2, S.29-30. (48) ES, 4-1, S.2-3.
- (49) ミンヘル・フーコー(訳: 田村敏)『狂気の歴史』新潮社 1975 p.219f. (50) ノーロー、前掲載書、p.221.
- (51) Theodore Ziolkowski, *German Romanticism and Its Institutions*, Princeton 1990, pp.143ff.

- (52) Zacharias Konrad von Uffenbach, *Merkwürdige Reisen durch Niedersachsen, Holland und Engelland*, 2. Th. Ulm 1753, S.90ff.
- (53) 18世紀に書かれた懲治院の觀察記録についての見取り図を手につくれるのは下記の論文である。Anke Bennholdt-Thomson und Alfredo Guzzoni, *Der Irrenhausbesuch - Ein Topos in der Literatur um 1800*, in: *Aurora*, 42, 1982, S. 82-110.
- (54) 「職人の若造」そして「水車小屋の人夫」はいずれも不逞な若者の代名詞のようによく用いられている。
- (55) *Beschreibung des Chur Sächsischen allgemeinen Zucht= Wäsen= und Armen=Hauses*, Dresden und Leipzig 1721, S.41-64. (56) ES, 2-2, S.130f.
- (57) Carl Friedrich Pockels, *Denkwürdigkeiten zur Erfahrungseelenlehre und Charakterkunde*, 1.Sammlung, Halle 1794, S.153f. ターネルの著述から多くの「ポッケルスのこの著作も『経験心理の学』と同様に心の病のデータを収集したものであった。
- (58) Pockels, a. a. O., S.167ff. (59) Pockels, a. a. O., S.171. (60) Pockels, a. a. O., S.166f.
- (61) Heinrich Bathasar Wagnitz, *Historische Nachrichten und Bemerkungen über die merkwürdigsten Zuchthäuser in Detuschland*, 3 Bände, Halle 1791-1794, hier 1. Bd., Halle 1791, S.35ff.
- (62) Wagnitz, a. a. O., S.39. (63) Wagnitz, *Ueber die moralische Verbesserung der Zuchthaus=Gefangenen*, Halle 1787, S.19.
- (64) Wagnitz, a. a. O., S.19-20. (65) ES, 3-2, S.2. (66) ES, 3-2, S.4. (67) ES, 3-2, S.4. (68) ES, 3-2, S.5. (69) ES, 3-2, S.7.
- (70) 当時の法制度を含めた同時代のコンテラストについては、下記の版に寄せられた小論を参照のこと。Friedrich Schiller, *Verbrecher aus Infamie* (1786), mit Kommentaren von Heinz Müller-Dietz und Martin Huber, Berlin 2006. またミラーの小説の元となった裁判記録を含めた作品の成立史については下記の版のロメンタールが参考になる。Friedrich Schiller: *Der Verbrecher aus verlorener Ehre*, mit Kommentaren von Alexander Kosenina, Stuttgart 2014.
- (71) シラーの小説の発表後、アーベルは小説のこともなった裁判記録に手をいれたものを発表している。Jacob Friedrich Abel, *Lebens=Geschichte Friedrich Schwans*, in: Ders., *Sammlung und Erklärung merkwürdiger Erscheinungen aus dem menschlichen Leben*, 2. Theil, Stuttgart 1787, S. 1-86, hier S.59ff.
- (72) Friedrich Schiller, *Verbrecher aus Infamie - eine wahre Geschichte*, in: *Thalia*, 1.Bd., 2.Hf., 1786, S. 20-58, hier S.22. (73) Schiller, a. a. O., S.23.
- (74) ドイツで発刊されたピタヴァル判例集はつぎのとおりである。Francois Gayot de Pitaval, *Causes célèbres et interessantes avec les jugemens*

- qui les ont décidés*, Paris 1734-43; de Pitaval, *Erzählung sonderbarer Rechtskündel, sammt deren gerichtlichen Entscheidung*, aus dem französischen übersetzt von Gottfried Kieseweiter, Leipzig 1747-1767; de Pitaval, *Merkwürdige Rechtsfälle als ein Beitrag zur Geschichte der Menschheit*, nach dem Französischen Werk des Pitaval durch mehrere Verfasser ausgearbeitet und mit einer Vorrede begleitet herausgegeben von Schiller, Jena 1792-1796. シュタールのシュートンや中世のローマンに於ける叙述について、下記の研究書を参考。Hans-Jürgen Lüsebrink, *Kriminalität und Literatur im Frankreich des 18. Jahrhunderts*, München 1983. シュタールの判例集を讀むと「注目すべき事件」または「有名な事件」といったタイトルを冠する類似の法令集（ただし本論で扱ふものに純粹に法学的な関心で讀まれたことわけはならぬ）が多数出版されるようになる。
- (75) E.F. Klein, *Ueber das Studium merkwürdiger Rechtsfälle*, in: *Annalen der Gesetzgebung und Rechtslehresamtheit*, 6Bd., 1790, S. 112-120, hier S.120.
- (76) Vgl. de Pitaval, *Erzählung sonderbarer Rechtskündel, sammt deren gerichtlichen Entscheidung*, Vorrede des Herrn Pitaval
- (77) de Pitaval (Schiller), Vorrede. (78) de Pitaval (Schiller), Vorrede. (79) Christian Heinrich Spielß, *Biographien der Selbstmörder*, 4 Bände, Leipzig 1786-89.
- (80) Christian Heinrich Spielß, *Biographien der Wahnsinnigen*, 4 Bände, Leipzig 1795-1796.
- (81) August Gottlieb Meißner, *Kriminalgeschichten*, Wien 1813. 各巻の冒頭に用ゐれるフランス語の序文は、一七九五年刊の『スケッチ』*Skizzen* 第一三巻に於かれた序文を短くしたものである。
- (82) Meißner, a. a. O., S.7. (83) Meißner, a. a. O., S.8. (84) Spielß, *Biographien der Wahnsinnigen*, 2Bd., S.58-59. (85) Spielß, a. a. O., S.59.
- (86) *Neue allgemeine deutsche Bibliothek*, 26. Bd., 1796, 1St., S.205. (87) Spielß, *Biographien der Wahnsinnigen*, 1Bd., S. IVf.
- (88) Tissot, *Abhandlung über die Nerven und deren Krankheiten*, deutsch herausgegeben von Joh. Christ. Gottlieb Ackermann, Leipzig 1781.
- (89) Tissot, a. a. O., 2Th., 2Bd., S.171ff. (90) Tissot, a. a. O., 1Th., 2Bd., S.265ff. (91) Tissot, a. a. O., 1Th., 1Bd., S.2.
- (92) Tissot, a. a. O., 1Th., 2Bd., S.352. (93) Vgl. Ludwig Vogel, *Dietetisches Lexikon*, 3Bd., Vorrede, S. VII. (94) ES., 1-1, S.111-112.
- (95) ES., 1-1, S.111. (96) ES., 1-1, S.112. (97) ES., 1-1, S.113.
- (98) Karl Philipp Moritz, *Aussichten zu einer Experimentalseelenlehre an Herrn Direktor Gedike ...*, Berlin 1782, S.18. (99) Moritz, a. a. O., S.15.

- (100) Moritz, a. a. O., S.18.
- (101) モーリッツが心理学的小説と副題をつけた『アントン・ライザー』(一七八五―九四)は、この子ども時代の記憶を扱った作品であって(初出はES, 2.1, 2.2, 8.1, 8.2の各号)。ただし同雑誌に収録された子ども頃の記憶を書きとめた断片とは全く異なり、創作の手の加えられた文学作品ではない)‘とりわけ教育が子どもに与える悪影響を書き残すという実践のなかでうまれたもの’であった。ES, 5.2, S.113.
- (102) ES, 1.1, S.107. (103) ES, 1.1, S.108f.
- (104) 主要な論考は次の通り。同テーマの著作は一九世紀初頭まで出版され続けていた。Joachim Heinrich Campe, *Über das Zweckmäßige in Belohnungen und Strafen*, in: Ders. (Hg.), *Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens*, 10. Theil, Wien und Braunschweig 1788, S. 445-658; Friedrich Gabriel Rasewitz, *Ueber die Natur und Anwendung der Strafen in Erziehungsanstalten*, in: Ders. (Hg.), *Gedanken Vorschläge und Wünsche zur Verbesserung der öffentlichen Erziehung*, 2.Bd., 2.St., Berlin und Stettin 1779, S.103-134; Gottfried Große, *Ueber die Schulstrafen und ihre Anwendung*, in: Rasewitz (Hg.), a. a. O., 1.Bd., 4.St., 1778, S.57-88; Friedrich Gedicke, *Hoffnung und Furcht, Lob und Tadel, auf der Wage des Pädagogen*, in: Ders., *Gesammelte Schulschriften*, Berlin 1789, S.40-75; August Albanus, *Ueber pädagogische Strafen und Belohnungen*, Riga 1797.

Ein Blick, der in die Seele dringt. Diskursanalytische Überlegungen zum Begriff der
„Seelenkrankheit“ im *Magazin zur Erfahrungsseelenkunde* (1783-93)

Kotaro YOSHIDA

Im Gegensatz zum dualistischen Menschenbild treten im Laufe des 18. Jahrhunderts die bis dahin getrennten Sphären von Körper und Geist in eine Wechselbeziehung. Auf der Grundlage dieses Menschbildes bildet sich die neue Symptomatik der Seelenkrankheit aus. Das Krankheitsbild der Seelenkrankheit ist allerdings nicht nur das Produkt psychologischer, sondern auch philosophischer, religiöser und pädagogischer Deutungsmuster. Ziel meines Vortrags ist es, die Vielschichtigkeit dieses Krankheitsbildes im Kontext der Diskurse über die Seelenkrankheit des 18. Jahrhunderts zu erkunden. Dabei steht eine Reihe von Aufsätzen aus der Zeitschrift *Gnothi Sauton – Magazin zur Erfahrungsseelenkunde* (1783-93) im Mittelpunkt meiner Untersuchung. Darüber hinaus sollen auch Textsorten wie Berichte über Zuchthäuser in Deutschland oder die Prosaschriften Schillers mit einbezogen werden. Bei der Entstehung des Krankheitsbildes der Seelenkrankheit kommt einem spezifischen Blickverfahren eine entscheidende Rolle zu, das in die Tiefe der Seele dringt und eine Innengeschichte des Menschen schöpferisch erfasst. Am Ende meines Vortrags soll die Wirkung dieser Wahrnehmungsweise am Beispiel des institutionalisierten Beobachtungsverhältnisses von Lehrer und Schüler erläutert werden.